

企画展

# 雛人形を飾るワケ

かみさと町のひなまつり



## ごあいさつ

この度は当館の企画展『上里町のひなまつり-雛人形を飾るワケ-』にお越しいただき、誠にありがとうございます。

今回、紹介するのは上里町内の旧家で飾られていた雛人形です。これらは令和2年に大字忍保の福田家から、さらに翌令和3年に同大字の敷地家から上里町に寄贈されたものです。華やかで愛らしい姿は私たちに春が来たことを伝えてくれます。さらに今回は、両家の人形にくわえ、既に郷土資料館に収蔵されている雛人形も併せて展示します。

また、人形は日本古来の読み方で「ヒトガタ」とも読み、本来は木や紙で作られた人の形をしたものを感じます。ある時は自分や大切な人の身代わりに、またある時は薫人形のように誰かを呪うために使われました。本展示では、ヒトガタである雛人形がどのような意義を持って飾られたのかを考えます。

最後に、ここで紹介する人形たちはいずれも手作りで、それぞれあどけなさを持ったものや凛々しい表情をしたもの、あるいは少しひょうきんな顔をしたものなど等、一つ一つの表情に違いがあります。もしかすると身近な人によく似た人形もいるかもしれません。家族や恋人、友人等、大切な人を思い浮かべながら鑑賞してみてください。

上里町立郷土資料館

### 凡例

1. 本書は、上里町立郷土資料館企画展「かみさと町のひなまつり 雛人形を飾るワケ」（会期：令和6年3月2日～令和6年4月30日まで）の展示解説です。
2. 本展の企画及び本書の作成は、生涯学習課文化財係 林 道義が担当し、郷土資料館スタッフの助けを得ました。
3. 本書の内容は、展示の構成と概ね一致しますが、一部で異なる部分があります。
4. 本展で展示した資料（写真、図版等を含む）は、特に記載のない場合を除き、いずれも町教育委員会の所管です。

## 上里町の雛人形いろいろ

「雛人形」とは、3月3日の桃の節句に飾られる人形のことです。一般にその歴史は古く、ルーツは平安時代以前にまで遡るともいわれます。しかし、現在のような形の雛人形が飾られるようになるのは、今から400年ほど前の江戸時代になってからであり、武士や商人等、都市部の有力者たちの間で盛んに流行しました。この流行の波が全国に波及するのは、さらに後の明治時代になってからです。

これまで上里町内で確認されている雛人形は、大きく3種類に分類されます。ここではそれらを紹介しながらかつて町内で行われていた雛祭りがどのようなものだったのかを考えたいと思います。

### (1) 内裏雛

「内裏雛（だいりびな）」は、皇后と天皇を模した男女2体の人形（女雛、男雛という）をセットで飾るものを持ちます。衣装や付属する調度品が宮中の人々の暮らしをモデルにして作られているため、この名称が付けられました。また町内で見つかった内裏雛は、さらに「古今雛（こきんびな）」と「御殿飾り」に分かれます。

#### ・古今雛

江戸時代後期の人形師である原舟月によって考案された雛人形です。華やかで美しかったことから人気を博し、現在の雛人形の直接のルーツになったといわれます。

女雛、男雛とも比較的大型に作られており、女雛は正面で着物の袖を交差させているのが特徴です。

また女雛の装束に鳳凰等の美しい刺繡が施されているのも一つのチャームポイントになっています。



▲古今雛（女雛）の袖

多くの場合、両袖には鳳凰が刺繡される



▲古今雛（上：女雛/下：男雛）  
大字忍保 敷地家旧蔵、明治時代後半ごろ



▲古今雛（上：女雛/下：男雛）  
大字忍保 福田家旧蔵、明治時代後半ごろ



▲古今雛（男雛：左/女雛：右）  
上里町内、明治時代後半から大正時代ごろ



▲古今雛（男雛：左/女雛：右）  
上里町内、明治時代ごろ



▲古今雛（上：女雛/下：男雛）  
大字忍保 福田家旧蔵、明治時代後半ごろ



▲古今雛（男雛：上/女雛：下）  
大字忍保 福田家旧蔵、明治時代後半ごろ

・御殿飾り

御殿飾りは、女雛と男雛に加え、随身や五人囃子、三人官女、さらに貴族の邸宅を模した「御殿」が付属するものを指します。

現代の私たちから見ると、さながら平安時代を舞台にしたドールハウスともいいくべき様相をしています。御殿飾りは大正時代から昭和の前半にかけて流行したもので、人形自体は古今雛より小型の作りをしているのが特徴です。

御殿飾り ▶

大字忍保 福田家旧蔵、  
昭和前半から中ごろ

大きな御殿が付属します。また人形の頭部は石膏で作られており、現代の雛人形と同じ作りをしています。

福田家には、昭和30年代にこの雛人形を撮影した写真が遺されており、この頃に飾られていたことが分かります。また、これら人形は寄贈者のお母様が所有していたものでした。そのため、実家から嫁ぎ先に持ち込まれた嫁入り道具であったことが考えられます。



御殿飾り ▶

大字忍保 敷地家旧蔵、大  
正から昭和初頭ごろ

質素で落ち着いたつくりをしています。また人形の頭部は桐のおが肩を糊で固めた伝統的なつくり方で作成されました。そのため、福田家の御殿飾りより一段階古いものと考えることができます。



## 毛氈 大字忍保 福田家旧蔵▶

これらの内裏雛は製作技法から、古今雛が明治時代後半、御殿飾りが昭和前半頃にかけて作られたものであることがわかりました。また人形の下に敷かれていた赤い毛氈（もうせん）には、「明治廿八（三十八）年」の墨書きがされており、その頃、既に町内で雛祭りが行われていたことが判明しました。

また敷地家、福田家の例から内裏雛は、一つの家庭に複数セットが存在するのが特徴といえます。

のことから娘の誕生に合わせ、大人達たちが雛人形を用意していたことが分かります。また同時期の人形が多いことから、妹等、新たに娘が誕生した場合にも内裏雛が買い足されていったと考えられます。



## コラム 学芸員の独り言 お雛様の掛け軸

右の資料は、桶川市の石田家から寄贈された、雛人形を描いた掛け軸です。上段に女雛と男雛（いわゆる「おひな様」と「お内裏様」）、中段に官女、下段に五人囃子が描かれています。このような掛け軸は、実際の人形の代替品として床の間等に飾られたといわれています。

本資料は木版で印刷されており、目が覚めるような鮮やかな赤色の色彩が印象的です。この赤色は明治期に盛んに流行した輸入顔料によるもので、この掛け軸も明治時代のものと考えることができます。また、ここに描かれた雛人形は宮中の人々の様子を模した「内裏雛」に分類されるものであり、今回展示した本物の内裏雛と同時に描かれたことがわかります。掛け軸に描かれた雛人形と実際の雛人形、二つを比較しても面白いかもしれません。



## (2) 祀雛

神雛（かみしもひな）は、武士の正装である「袴」を着た男の子の姿をした人形です。どの人形もあどけなく、かわいらしい表情をしています。髪の毛は失われているものが多いですが、髪型はかつての子供の髪型である「ケシ坊主」やおかっぱ頭をしており、子供をモチーフにしていることが分かります。

また神雛は、初節句のお祝いの贈答用に作られたものとされており、町内の神雛も底部に送り主や宛先の名前、贈答日等が書きこまれたものが多くありました。贈答日の記載は、人形の年代を特定する根拠になります。郷土資料館が収蔵する神雛のうち、贈答日の最も古いものは明治35年（1902）であり、この年代は古今雛の飾られた時期ともほぼ一致します。



▲神雛 底部

「福田イチ 仁手村久々字」と書かれています。仁手村の親類から福田イチさんに宛て贈られたものであることがわかります。



▲神雛 底部

「明治三十五年 福田イチ」と書かれている。明治35年に贈答されたものです。



▲神雛 大字忍保 福田家旧蔵 明治から大正時代ごろ

### 3 浮世人形

浮世人形は、現実に存在する風景や歴史人物、伝説等をモチーフに作られた人形のことを指します。神雑と同様、初節句のお祝いに贈答用に作られました。また現在のジオラマのように台座や人形を収納するための箱が付属することも特徴の一つです。箱は、木製やボール紙製、ガラス蓋を持つもの、全面がガラスで作られたものなどがあります。

また、町内で見つかった浮世人形には、女官や女神をかたどった美しい女性の姿をしたものが多く、ほかに昔話の登場人物や様々な神様、さらには日本舞踊等、芸能の演目等をモチーフにしたものが多くありました。

これらのモチーフには富や健康、勉学、芸事等、それぞれ由来を持つものが多く、何らかの意味を持って人形を選び贈答していたものと考えられます。また、人形の題材が同じでも細かいバリエーションが多いのも、鑑賞していて興味深い点です。

ここでは、人形の題材の性格ごとに浮世人形を紹介します。

#### ・女官/女神

いずれも若い女性の姿をしており、底抜けに鮮やかで美しい衣装を着けているのが特徴です。同様の人形は町内で多く見つかっており当時の人気を窺い知ることができます。

今回は春らしく、「梅小町」と表題が書かれた人形を展示しました。



#### ▲浮世人形「梅小町」

大字忍保 福田家/明治～昭和時代

大きな团扇（うちわ）を持ち、中国風の着物をまとっています。箱には「梅小町」と墨書きがされています。

### ・昔話

浮世人形の題材には、子供たちにどってなじみ深い物語や昔話の登場人物も多く登場します。

これらは教科書や童謡、唱歌（かつて小学校で教えられた歌謡曲）になっている作品が多いのも特徴です。ここでは主なものをお紹介します。

#### 桃太郎（大字忍保敷地家/明治時代）▶

いわゆる知れたおとぎ話の一つです。桃から生まれた桃太郎が犬、猿、雉を引き連れ鬼退治に行く物語です。意外にも桃太郎のストーリーが子供たちに浸透したのは明治時代になってからで当時の小学校の教科書に採用されたのがきっかけでした。



#### ◀金太郎（大字忍保敷地家/明治時代）

金太郎も有名な昔話の一つです。平安時代に実在した武士坂田金時をモデルにしています。江戸時代には浮世絵の題材なっており、広く親しまれました。

また明治時代には童謡にもなっています。この曲は現在も「まさかり担いだ♪」の歌い出しでおなじみです。敷地家の金太郎も明治時代に製作されたと考えられ、金太郎が子供たちの間にも広まっていたことを知ることができます。

### 舌切り雀▶

町内/明治～大正時代

舌切り雀は、正直爺さんと雀の物語です。正直爺さんは怪我をした雀を看病しますが、それを疎ましく思った欲張りばあさんは、ハサミで雀の舌を切って家から追い出しまいます。その出来事にショックを受けたお爺さんは雀を探し回ります。お爺さんは雀と再会でき恩返しを受ける物語です。

この物語は、明治時代の国語教科書にも掲載されており、後に童謡「舌切り雀」にもなっています。



### 花咲かじいさん▶

大字忍保 敷地家旧蔵/昭和時代

「花咲かじい」、「花咲かばなし」とも呼ばれます。民話の一つで正直爺さんと犬の物語です。

正直爺さんは犬の導きで畑で財宝を掘り当てますが、これを疎んだ欲張り爺さんによって犬は殺されてしまいます。犬の死がいからは木が生え、正直爺さんはこの木から白を作りますが、これも欲張り爺さんに燃やされてしまいます。しかし、正直爺さんは燃え残った灰を集め枯れ木にかけると枯れ木は満開の桜に姿をかえました。花を見た殿様は正直爺さんを褒めたたえ、褒美の財宝を与えました。

やはり、この物語も明治時代に唱歌となっており、「花咲爺」として現在まで親しまれています。



### ・努力と勉学

浮世人形の題材として、天神様や二宮金次郎のように努力や勉学を象徴するものが目につきます。人形を送る側に「賢い子になってほしい」という意識が内在していたように思われます。



### ◆小野道風（おののとうふう）

大字忍保 福田家旧蔵 明治から  
大正時代

柳の木と小野道風の人形です。小野道風は「三蹟（さんせき：平安時代に活躍した3人の書道の大家。道風のほか、藤原佐理、藤原行成がいます。）」の一人とされ、日本風の書道を完成させた人物と評価されています。道風には、カエルが柳の枝に何度も飛びつくのを見て、努力の大切さを悟り、書道を大成させたという逸話があります。やはり明治時代には、唱歌にもなっており教科書にも載せられました。



### ◆二宮金次郎

大字忍保 福田家旧蔵 明治から昭和時代

江戸時代に実在した農政家（現在の農業経済学者にあたります。）です。

金次郎は幼名で成人後は尊徳と名乗り、各地の荒廃した農村の復興に尽力した人物です。また、薪を運びながら勉学に励んだという伝説から、勤勉さの象徴として、かつては小学校の国語教科書にも登場し、全国の小学校には二宮金次郎像が置かれました。この浮世人形も薪を背負いながら勉学をする姿を再現しています。

### 天神様▼►

(上：上里町内/下：大字忍保 福田家旧蔵 明治から昭和時代)

天神様とは、平安時代に実在した学者で政治家である菅原道真公のことです。道真公は当時、当代きっての大学者と評価され、右大臣にまでなった人物です。そのため学問の神様として信仰を集めています。

しかし、不幸にも政敵から疎まれ大宰府に左遷されてしまいます。人形には梅の花が付属しますが、これは大宰府に向かう際、庭の梅を和歌に歌ったことに由来します。また道真公は失意の中、大宰府で亡くなりますが、棺を運んだ牛が止まった場所を墓としたといわれ、その場所が後に大宰府天満宮になったとされています。そのため、福田家の天神様は梅に加え、牛の人形が付属します。



・健康と長寿

浮世人形には、健康や長寿に関連した題材がしばしば用いられます。後述しますが子供たちの健康や長寿を願い飾られたと考えられます。

鐘馗様▶

大字忍保 福田家旧蔵  
(明治時代)

鐘馗(しょうき)様は、中国にルーツを持つ神様です。外見はひげ面で頭巾をかぶった男性の姿をしています。また顔つきも厳めしく、睨みつけるような赤い顔をしています。これには魔除けの意味があり、疱瘡(天然痘等の伝染病)除けや学業成就のご利益があるとされます。



◀高砂

町内、明治時代

高砂(たかさご)は能の演目一つです。2本の松の精霊である翁と嫗を描いたストーリーで仲睦まじい老夫婦の様子が人形で表現されています。子供たちの長寿や夫婦円満を祈ったのでしょうか。町内で多く見つかっており、人気の題材であったことが覗えます。

### 寿老人▶

大字忍保 福田家旧蔵

寿老人（じゅろうじん）とは、中国にルーツを持つ神様です。長い頭と白いひげを持った老人の姿で描かれるのが特徴です。七福神の一人でもあり、長寿を司るともいわれます。

子供たちの長寿を祈って飾られたものと考えられます。



### ・豊かさと幸せ

また浮世人形の中に  
は、大黒様や恵比須様等、豊作や豊かさを司る神様をモチーフにしたものが多くみられます。今回はその代表として大黒様を展示しました。また養蚕（蚕を飼育し、繭を収穫すること）をモチーフとした人形も見つかっています。養蚕は昭和50年頃まで上里町の主要産業の一つであり、農家にとって大きな収入となっていました。養蚕の成功を含め、豊かさや幸せを祈り人形を飾ったと考えられます。



### ▲大黒天

大字忍保 福田家旧蔵 明治時代

インドにルーツを持つ神様です。打ち出の小槌を持っているのが特徴です。日本に伝わった後、日本神話に登場する大国主命（おおくにぬしのみこと）と同一視され五穀豊穣の神として信仰されるようになりました。

## 衣笠様と春駒

衣笠様も春駒も養蚕に関連した題材です。衣笠様は、養蚕の豊作を祈り信仰された神様です。また春駒は芸能の一種です。正月に馬の頭の作り物をもった人々が家々を回って、歌や踊りを見せて歩きました。群馬県では春駒が訪れた家では養蚕が成功するといわれており、上里町内でも昭和期に春駒が家々を回ったという伝承が遺されています。

阪本英二氏によればこれら人形は、明治から昭和の間に娘が生まれると成長し養蚕がうまくなることを祈り、送られたといいます。



### ▲衣笠様

左：大字忍保 敷地家旧藏

右：町内

いずれも明治から昭和時代

### 春駒▶

大字忍保 福田家旧藏、

昭和時代



・芸事・舞踊

浮世人形の題材には、芸事に関連したものも多く見受けられます。汐汲（しおくみ）をはじめ歌舞伎や能、舞踊にルーツを持つものが多いようです。

鼓を打つ少女▶

大字忍保 敷地家旧蔵 大正から昭和時代

鼓（つづみ）を打つ姿をした少女の人形です。おかげの頭に烏帽子を付けています。



◀汐汲

大字忍保 福田家  
旧蔵

明治から大正

汐汲とは、歌舞伎や淨瑠璃の演目の一つです。平安時代の貴族、在原行平と恋に落ちた海女の松風の様子が再現されます。

## 胡蝶の舞▶

大字忍保 敷地家旧蔵 明治から  
大正時代

蝶のような翅（はね）を付けた女性人形です。ラベルなどがなく、正式な名称は不明ですが、宮中等で行われていた「胡蝶の舞」をモデルにしたものと考えられます。胡蝶（こちょう）の舞は、日本の伝統的な音楽である雅楽に合わせて踊る舞楽の一つです。当該人形のように踊り手が背中に翅をつけ、雅楽の曲に合わせ舞われました。



## コラム 学芸員の独り言 浮世人形題材診断

浮世人形の場合、経年変化によって表題やラベルがなくなってしまい、何を題材として作られた人形なのか分からぬるものが多くあります。この場合、どうやって題材を判断するのか、最も重要な手がかりになるのが人形に付属するアイテムです。例えば、天神様は梅と縁の深かった人物であるため一緒に梅の造花が付属する場合が多くあります。小野道風は柳の逸話から柳の木、鐘馗様の場合は、頭巾を被っているのかが決め手になります。西洋の絵画では、画家が絵を描く際に絵画の題材となった人物を明示するために彼らを象徴する道具をあえて書き込みます。美術用語ではこれをアトリビュートといいますが、浮世人形でも同じことをしていることがうかがえます。



### ▲金太郎と鯉

金太郎と共にしばしば描かれる題材として鯉がいます。敷地家の金太郎人形にも鯉の作り物が付属します。写真は国会図書館蔵『芳年略画』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1312826>) より引用しています。

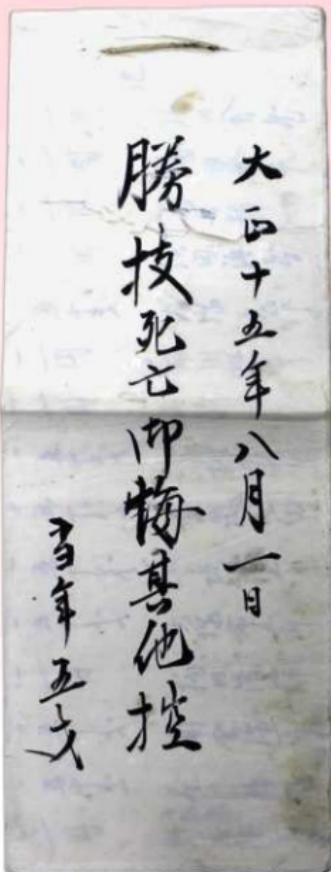
## 雛人形を飾るワケ 何故、雛人形が飾られたのか

ここまで明治から昭和時代にかけて上里町で飾られてきた雛人形を紹介してきました。いずれの人形も生まれたばかりの娘に両親や親戚等、身近な大人達が用意したものでした。それでは、一体何のためにこれら人形が用意され、毎年飾られてきたのでしょうか。残された資料からそのワケを考えたいと思います。

### ワケ その1 娘の身代わり すこやかな成長を祈って

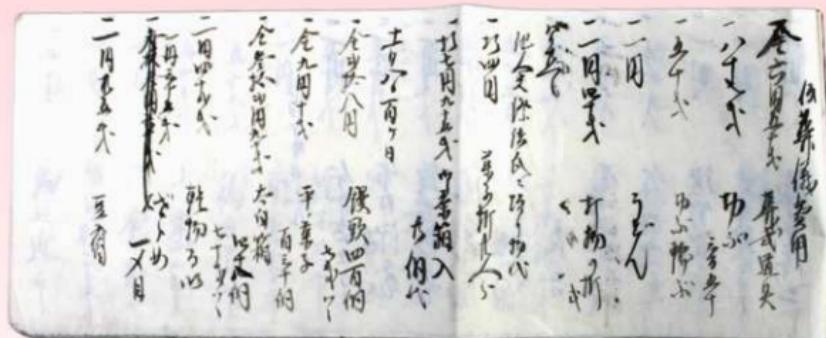
本来、雛人形は紙を切って作った「人形（ひとがた）」がその起源であったとされています。これら人形は、種々の災厄を所有者から移し、川に流す「雛流し」と呼ばれる風習に用いられ、雛祭りのルーツとなりました。この風習は地域によっては「流し雛」として現在も行われています。そのため内裏雛等の私たちの知る雛人形も健康や安全を祈って娘の身代わりとして飾られるようになりました。

今回、展示した雛人形は、いずれも明治後半から昭和前半にかけて作られたものです。この時代は、現在ほど医療技術が発達していなかったため、乳児死亡率が高く、病気や事故等で亡くなることが多く、子供の命は不安定で儚いものと考えられていました。現代も子供たちの成長を祈り、七五三にお宮参りをするのもこの頃の名残とされています。親たちにとって子供たちの健康と無事の成長は今以上に切実な願いでした。



▲勝枝死亡御悔其他控  
大字忍保 福田家旧蔵 大正15年  
この時期の乳幼児死亡率の高さが  
うかがえます。

福田家から雛人形と共に寄贈された資料にこの時代の乳幼児死亡率の高さを示す衝撃的な古文書がみつかりました。当該文書の表紙には、「大正十五年八月一日 当年五歳 勝枝死亡御悔其他控（かつえしほうおくやみ そのたひかえ）」と題名が書かれており、内容は勝枝さんという名前の5歳になる娘が亡くなった際の葬儀の香典の額や経費を記録したものであることがわかりました。「勝枝」という名前は、袴雛の底部にも書かれており、雛人形の持ち主が幼くして亡くなっていたことが判明しました。このことからも浮世人形に鐘馗様や寿老人、高砂等、長寿や健康に関連する題材が多いのにも納得がいきます。当時、このように幼くして亡くなる子供が多く、雛人形に子供たちの健やかな成長を願っていたことが想像されます。



### ▲勝枝死亡御悔 其他控の中身の 一部とその読み 下し

写真の部分には、葬儀から百箇日法要までの経費が項目ごとにまとめられていました。うどんや菓子折りなどを購入して葬儀の準備をしていました。精進落としや香典返しとして利用したのでしょうか。

「読み下し」	
假算儀費用	金六円五十銭 葬式道具
一円四十銭	八十銭 切ふ（切替？）
一円四十銭	五十銭 切ふ輪ふ
一円四十銭	一円 うどん 打物の
打式（打數）	一一一 一一一
一一一 一一一	他人及び法氏（法師）の帰り際物代
一一一 一一一	十四円 菓子折り二十人分
一一一 一一一	十七円九十五銭 御茶箱入二十個代
一一一 一一一	十一月八日 百ヶ日
一一一 一一一	金二十八円 鎌頭四百個 七銭
一一一 一一一	金九円十銭 平の菓子百三十個
一一一 一一一	金三十二円九十銭 太白（砂糖）箱四十八個
一一一 一一一	一円四十二銭 乾物百個
一一一 一一一	一円三十五銭 砂らめ
一一一 一一一	一円五十銭 豆腐 一メ目

勝枝さんの名前が書かれた神雛とその底部▶  
大字忍保 福田家旧蔵  
大正時代

福田家の神雛からは、  
亡くなった勝枝さんの  
名前が書かれた人形が  
3点見つかっています。

神雛が初節句の贈答品として、人形が送られた5年後には勝枝さんは亡くなっていることになります。虚しさを感じる資料です。



▶  
「東ノ新宅ヨリ勝  
枝」とあり、勝枝さ  
んに宛てられた人形  
であることがわかり  
ます



## コラム 学芸員の独り言 今も残る身代わり人形

現在、雛人形を娘の身代わりとする考え方は薄れしており、そのことを意識して雛人形を飾るということはほとんど無くなりました。しかし、人形を使った魔除けや厄除けが全く残っていないというわけではありません。例えば、神社の年中行事に大祓と呼ばれる儀式があります。大祓とは、夏と年末の2回、体についた罪や穢れを払う儀式です。紙で作った人形で全身を撫で、さらに息を吹きかけることで体についた罪穢れを人形に移し、災厄を取り除くことができると考えられていました。特に夏は食中毒や伝染病等が起きやすい時期であり、大祓を行うことで健康に過ごせると信じられていました。現在の上里町内でも菅原神社等で実施されています。

## ワケ その2 子供の幸せを祈って あるいは類感呪術

浮世人形には、大黒様のような縁起の良いもの、さらに天神様のように勉学、あるいは芸事や長寿等をモチーフとする人形が多く含まれています。すでに説明したように「高砂」は、長寿や夫婦円満を象徴し、大黒様は富や豊かさ等を司る神様でした。また、衣笠様や春駒の人形は養蚕が上手になるよう願いを込められた人形です。これらの人形の題材からは、生まれた子供が将来、豊かで幸せな生活をして欲しいという大人たちの思いを読み取ることができます。また勉学、芸事をモチーフにした人形も多く、やはり賢い子になってほしい、勤勉な子に育ってほしい、芸事が上手になってほしいという大人たちの願望を読み取ることができます。あるいは大人たちは子供たちの理想の人生像を人形に仮託していたとも言い換えることができます。

ところでこのような、願掛けを行って誰かに望ましいことを実現させる行為は一種の「呪術」と評価することもできます。特に類似した行為を行い、別の事象の実現を目指すことを文化人類学や民俗学の用語で「類感呪術（るいかんじゅじゅつ）」といいます。身近（？）なものでは、丑の刻参りで雛人形に釘を打ち付けることや手足に巻いたミサンガが切れると願いが叶うというが「類感呪術」に当たります。立派な子に育ち長生きしてもらいたい、あるいは豊かな生活をさせたいという思いから人形の贈答や飾り付けをするのは、類感呪術と解釈できます。

## おわりに

最後まで本展示会及び本書をご覧いただき、ありがとうございました。  
町内の雛人形を紹介しながら、なぜこれら人形が飾られたのか、飾ることにどのような意味があったのかを考えてきました。その結果、雛人形自体が病気や不幸から子供を守る身代わりとしての役割を持っていたことが分かりました。また同時に大人達は子供の成長に対する願いや願望を雛人形に仮託し、贈答や雛祭りの飾り付けを行っていたことも分かります。

雛人形があるときは所有者の身代わりとして機能するとするならば、その所有者と人形は同一の存在であり、長寿や健康、学業の向上などの人形の属性が所有者に及ぶのも不思議ではありません。

いずれにせよ、これら雛人形が飾られた根幹には、現代ほど豊かではなかった時代に娘を無事に成長させ、幸せな暮らしをさせたいという人々の思いがありました。現在は栄養状態の改善や医療技術の発達等により乳幼児の死亡率は劇的に低くなり、また幸せや豊かさの形も人それぞれで多様化したように思われます。近年では一般に、雛人形のトレンドが段飾りなどの大型のものからコンパクトなものに移行しり、あるいは雛人形自体を飾らなくなったという話を聞きます。また、人形供養や雛人形を処分したいという話も耳にすることが多くなりました。このことは住宅の構造等、生活様式の変化が影響するともいわれますが、医療技術をはじめ子供たちの生活から死が遠のいたこともその原因なのではないかと感じます。

## コラム 学芸員の独り言 「呪術」と「呪詛」

「呪術（じゅじゅつ）」とは普段、あまり使うことのない言葉ですが、小説等のフィクションではよく目にします。例えば平安時代を舞台に安倍晴明が呪術を駆使して事件を解決する『陰陽師』（原作：夢枕獏）は、20年ほど前に大きなブームになりました。また呪術がタイトルに使われている作品として、最近では週刊少年ジャンプに連載されている『呪術廻戦』があります（筆者はまだ読めていません。）。

では、そもそも「呪術」とは何でしょうか。辞書によると、「超自然的な存在に訴えることによって、病気治療、降雨、豊作、豊漁などの望ましいことの実現を目指した行為（『日本大百科全書』）」と定義されています。「超自然」とは神仏等の科学では説明できない存在のことを指します。つまり、安倍晴明が式神を使い悪霊と戦うのも呪術であり、身近なものは神社でお守りを買ったりするのも呪術といえます。

また似たような言葉に「呪詛（じゅそ）」という言葉があります。こちらも辞書で意味を引いてみると、「ある特定の人や物事を激しく憎み、神仏に祈願してそれを害しようとする（『日本国語大辞典』より）」とあります。身近なものでは薫人形がその代表でしょうか。

このように「呪術」と「呪詛」、どちらも同様に超自然の力を使い物事を実現しようとする行為です。唯一の違いは「呪詛」は憎しみ等のネガティブな感情に基づき行っていることといえます。意外にも身近で近接した関係にある呪術と呪詛ですが、二つの分かれ道は一体何なのでしょうか。

### 【参考文献】

- 畠野栄三『全国郷土玩具ガイド2』主婦の世界出版社 1992年  
武井武雄『日本郷土玩具 東の部 西の部』金港堂 1934年  
山田徳兵衛『日本人形史』富山房 1933年  
山田徳兵衛『新編日本人形史』角川書店 1961年  
猿渡土貴「子供の成長」谷口貴ほか編『日本人の一生』八千代出版 2014年  
鈴木由利子「妊娠と出産の民俗」谷口貴ほか編『日本人の一生』八千代出版 2014年  
フレイザー「類感呪術或いは模倣呪術」『金枝篇』第1巻 岩波文庫 1951年  
菊池浩平「薫人形はなぜ怖いのか」「ここを読む 人形と人間のあいだ』2022年

奥付

企画展 展示解説

かみさと町のひなまつり

-雛人形を飾るワケ-

発行 令和6年 3月 2日

上里町立郷土資料館



上里町立郷土資料館  
2026年3月